

## 最優秀賞

「私が大切にしている言葉」  
—あたりまえの反対—

渋谷教育学園幕張高等学校 二年

大野 綾 夏

親に叩き起こされた。何が起きているのかわからず、両親に連れられるがまま、寝起きの目には眩しすぎるパソコンの前に座った。あくびを押し殺し、ぼんやりと画面に流れる映像を見て、私は目を疑った。眠たい目をこすり、再び見ても、やはり衝撃を受けた。大きな波に乗って家や車がいくつも流されていったのだ。カメラの後ろでは何人もの泣き声や慌てた様子が伺えた。画面右上に小さく表示された日時を確認した。今日は三月十一日。

学校で友達や先生がみな心配してくれた。だが、人生の半分をアメリカで過ごしていた私の日本との繋がりは薄く、この重大性がわからなかった。ただ、日本が今大変なことになっていることだけは八歳の私にもわかった。そこで、九歳になる誕生日会のプレゼントに、募金を友達にお願いした。十万円集まり、インターネット上で募金を済ませた私は我な

がら大きな貢献をしたのだと、清々しい気持ちになった。そして、東日本大震災の四ヶ月後、私は五年に及ぶ在米生活に終止符を打ち、日本に帰国することになった。しかし、移住先は千葉県ということもあり、ほとんど震災の影響を感じることはなかった。

私は震災について知らないままではよろしくないと思い、被災地を訪れることにした。震災から八年半が経とうとしている今、テレビが伝えるように復興が進んだのかどうか自分の目で確かめたかった。被災者たちがどのような一からの街づくりを努めたのか。現在の気持ちはどうなのか。震災前の生活を取り戻すことができたのか。情報がすぐに手に入るこの時代においても、やはり現地に行かないと知り得ないことはあるだろうと思い、私は二泊三日のボランティアに申し込んだ。そして八月の中旬、私は周りを荒地に囲まれた陸前戸倉駅で一人バスを降りた。

「町民が集い、この町で亡くなった八百人の命を弔いながら花見を楽しむことができる広場を整備したい。」この思いを胸に八年間全国のボランティアとともに汗を流しながら活動してきた「隊長」と一緒に私は広場整備をした。広場は小さな丘の上に位置していて、だだっ広い太平洋が一望できた。水平線が伸びた海は、想像以上に綺麗だった。この海が何人もの命を奪ったと知っていても。

最終日は震災を後世に伝え続けるための施設を見学した。一番印象深いのは杉の下慰霊碑。ちょうどお盆の時期だったこともあり、お参りに来る人が絶えなかった。一人のお婆さんが車から降りると、「こうちゃん来たよ」と言い続けながら、慰霊碑に向かって手を合わせて微かな声で何かを呟いていた。私たちのことに気がつく、「この人たちは全員私たちのお友達なの」と言いながら、慰霊碑の裏にあるこの地区で亡くなった九十三名の名前を指差した。お婆さんはそう言い残して、辿々しい足取りで車へと戻った。顔ははつきりと見えなかったが、彼女の目に涙がたつぷりたまっているのは見えた。石に刻まれていた九十三名の名前一覧。さっきまではあまり考えていなかったが、そこに記されている一人ひとりがそれぞれの人生を歩んでいて、明るい未来が待っていた。それなのに、津波が一瞬の隙に彼らの全てを奪った。

最終日のミーティングで隊長はあたりまえの反対は何であるかと私に聞いた。私はわからなかった。

ありがとうは漢字で書くと「有難う」だ。つまり有ることが難しい、まれであるということ。めったにない事に巡り会う、それはすなわち奇跡だ。つまり、あたりまえの反対は「ありがとう」だと隊長は教えてくれた。

日々の出来事をあたりまえだと私たちは思っただけ毎日を通じて。蛇口を捻ると綺麗な水道水が出てくること、タツ

チ一つで部屋が一瞬で明るくなること、朝起きたら愛する家族がそこにいること。これらは当たり前なんかじゃない、本当は奇跡の連続なのだ。日本という恵まれた環境にいるから忘れてしまっているが、貧しい国ではそんな環境は当たり前ではない。そのことに隊長を含め多くの被災者が震災を通して気づいたという。

「有難し」なことに対してありがとう。生きて、出逢って、笑って。この何も特別に感じない日常の奇跡の連続に「ありがとう」と言うべきだと隊長は私の目をまっすぐに見て最後に訴えた。

震災を経験して、いかに日常があっけなく奪われるかを知った隊長の辛さを私は決して共有することはできない。しかし、日常の有り難さについて考えるきっかけになった。

ありがとうがいくら照れくさくても、次の機会が無いかもしれない。ならば、もっと素直に感謝の気持ち伝えたい相手にしつかりと伝える必要がある。大切な人はいつまでもいるとは限らない。だからこそありがとうの五文字は私にとっての大切な言葉になった。